

宮島達男

サーキット・ドローイング・インスタレーション

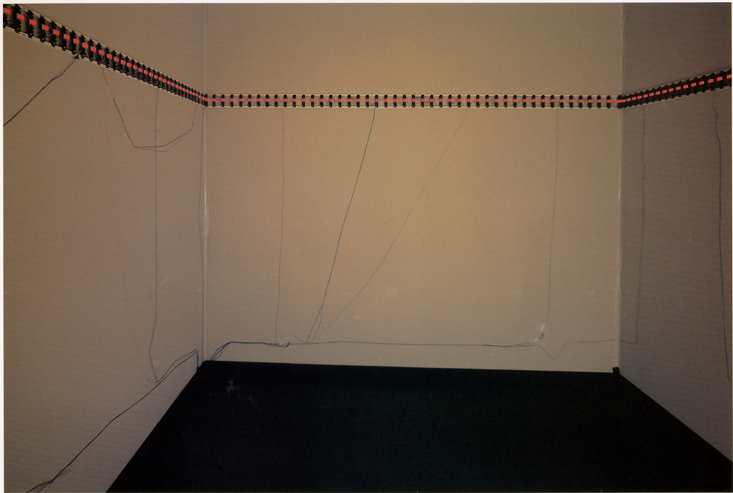
TATSUO MIYAJIMA

CIRCUIT DRAWING INSTALLATION

1989.4.5 (WED.)-4.15 (SAT.)

■ GALLERY

Surge ■



Counter room, 1988, Installation, 400x450x350cm



A digital counting machine

1988

11×2.5×1.5cm

撮影 広瀬忠司

宮島達男 Tatsuo MIYAJIMA

- 1957 東京に生まれる。
 1984 東京芸術大学卒業
 1986 東京芸術大学大学院修士課程終了

個展

- 1983 画廊パレルゴンII (東京)
 1986 真木画廊 (東京)
 秋山画廊 (東京)
 1987 サントリアートボックス (東京)
 ルナミ画廊 (東京)
 1988 Galleria Vivita (Italy)
 Heineken Gallery Bar (東京)

グループ展

- 1980 「Art Party」サブナードACホール (東京)
 1981 「神奈川県民ホール展」神奈川県民ホール (横浜)
 「6月展」東京芸術大学 (東京)
 1982 「UENO'82」東京芸術大学 (東京)
 「O.Voice」ケニア画廊 (東京)
 「新しい視覚表現の世界」西武百貨店渋谷店 (東京)
 「ペパーメントグリーン」Plan B (東京)
 1983 「バフォーマンスウィーク」かねこあとしG1 (東京)
 「ピククスワンズモア」Plan B (東京)
 「SCAN 春の公募」ビデオギャラリー SCAN (東京)
 「南向」ギャラリーM (福井)
 「フジヤマゲイシャ」東京芸術大学、京都芸術大学 (東京、京都)
 「批評家の選んだ8人展」ギャラリーNEWZ (東京)
 「海馬展」Gアートギャラリー (東京)
 「Sound Objet展」WAVE (東京)
 「フジヤマゲイシャ」東京芸術大学、京都芸術大学 (東京、京都)
 1985 「街と邑の展覧会」倉敷市立美術館 (岡山)
 「都市に隠れた動物たち」大阪府立現代美術センター (大阪)
 1986 「イメジマシオン展」Gアートギャラリー
 1988 「第8回ハラアニュアル」原美術館 (東京)
 "La Biennale di Venezia, Aperto '88" Venezia (Italy)
 「ルナミセレクション'88」ルナミ画廊
 「第7回平行芸術展」小原流会館 (東京)
 「動きの表現」埼玉県立近代美術館 (埼玉)
 "East Meets West Japanese and Italian Art today"
 Los Angeles (U.S.A.)

- それは、変化し続ける。
- それは、あらゆるものと関係を結ぶ。
- それは、永遠に続く。

宮島達男

テクノ・アートは、60年代各国で盛んになり、70年代一時下火となったが、今、ハード面での急速な発展に伴い、より手軽により複雑な表現が可能になり新たな時代を迎えようとしている。宮島もそうした時代を背景に表現を試みる作家の一人ではあるが、スケールにおいて特筆すべき作家である。

彼の土壌は、古いもの、新しいもの、東洋、西洋、日本的なもの、すべてを飲み込みカオスを現出しつつある都市東京そのものにあるように思える。

秩序と混乱、多種多様が交錯し混沌としつつある中で、宮島はそれらを混沌としてとらえるのではなく、生きている都市が持つ巨大なエネルギーにある調和を見出だそうとしているのではないだろうか。受身的にテクノロジーにかかわるのではなく、表現メディアとして使いこなす彼、混乱の中にこそ見出だされる秩序がハイテクノロジーを駆使する宮島の手によって自然の一部と成りすまし、リアリティーすら持ちはじめた。

宮島が「'88ハラアニュアル」で発表した「時の海」はそうした背景を象徴するかの様に東洋的感覚と電子アートとのみことな詩的融合をみせていた。

暗い室内に数百と散在する電子デジタル、それらがバラバラに刻む時は、途方もなく無限に流れる時間の渦に巻き込まれていく、そんな錯覚さえ私に与えてくれた。

この美しい世界は、宮島の持つおおきな視点にあるように思える。そして彼は、今回の個展で「サーキット・ドロ잉・インスタレーション」と銘打って次なる表現に取り組む。そんな彼の姿勢と今後の展開に大いに期待を寄せる。

ギャラリーサージ
プロデューサー 酒井信一